

はっさく

作・石原 燃

登場人物

佐伯美香（さえきみか・三九歳）

沖野雪郎（おきのゆきお・四四歳）

佐伯美香の部屋。

折り紙の鎖飾りやお花紙の花飾りが散乱している。

作業はまだ途中らしく、はさみやセロテープも転がっている。

沖野雪郎がそれらに押しやられて部屋の隅に小さくなり、

はっさくにナイフで切り込みを入れている。

雪郎は粉塵用のマスクをしている。

床に置かれた携帯電話が鳴る。

雪郎（奥に向かって）…：おい。

美香、奥の部屋からアップリケをしかけたTシャツを手に入ってくる。

美香、電話に出ようとするが切れる。

美香、Tシャツを置いて電話をかけ直す、

相手が出ないので電話を切り床に置く。

再びTシャツを手取る。

雪郎、はっさくを割って、美香に半分差し出す。

雪郎 これ。

美香 …：それさあ。

雪郎 はっさく。

美香 外したら、いいかげん。

雪郎 ああ。

雪郎、はっさくを置き、マスクを外す。

美香、奥の部屋に戻ろうとする。

雪郎 まだ終わらないの？

美香 今お茶入れるから。

雪郎 そういうことじゃなくて。

美香 キリ悪いの。

雪郎 座んなよ、とりあえず。久しぶりに来たんだから。

美香、しぶしぶ座る。

雪郎、置かれたはっさくを美香の方へ寄せる。

美香、はっさくには手を出さない。

美香 仕上げちゃわないといけないの、今日中に。明日橋本さんの誕生日でさ。

(七十七とアップリケをしたTシャツを見せて) 喜寿だから、ほら。

雪郎 こんな時に。

美香 (Tシャツを脇に置き) ごめん。

雪郎 そういうことじゃなくて。

美香 ……何しに来たの？

雪郎 一人は不安だと思って。

美香 大丈夫なのに。お母さんにはなんて？

雪郎 美香が一人で心配だからって。

美香 名前出したの？

雪郎 仕方ないだろ、こんな事態なんだから。

美香 ……。(と、置かれたはっさくを手取るが、食べずにもてあそぶ。)

雪郎 具合悪いのか？

美香 え？

雪郎 下痢が止まらないとか。鼻血が出るとか。

美香 なんです。

雪郎 ……いや、食欲なさそうだから。

美香 そんなことないよ。

雪郎 好きだっただろ、はっさく。うちに二人で挨拶しに行ったときさ、こればかり食ってたもんな。

美香 あの時はこのいうものが食べたい時期だったから。

雪郎 ……ああ。

美香 いいよ、雪郎のそこのはっさく、おいしいし。

雪郎 趣味みたいなものだから。

美香 そんなこと言ったら張り倒されるよ。

雪郎 これで食えてる訳じゃないし、薬屋の方が収入は多いくらいだから。

美香 感動したけどな、町中ははっさくの匂いがして。

美香、Tシャツを持って、立ち上がる。

雪郎 うちにこないか？

美香 なんです。

雪郎 うちなら部屋も余ってるし。

美香 意味がわかんないんだけど。
雪郎 お袋なら心配しないでいいよ。ちゃんと話したから。
美香 いや、そういう問題じゃなくて。
雪郎 何で言ってくれなかったんだって叱られたよ。女同士聞いてあげられることもあったかもしれないのにな。
美香 ちょっと待って、なにを話したの？

携帯電話が鳴る。

美香、電話に出る。

美香 はい。さっき出られなくてごめんね。……うそ、七十七じゃないの？
……って喜寿って。……あ、そっか。……だから数えってのはさあ。明日教える。
……もう、アップリケしちゃったよ。……ええ、そんな悪気なんかあるわけないのに。いいじゃないねえ、一歳くらい。ああ、もう、わかったよ。明日、私から謝るよ。いい、いい、謝れば済む話なんだから。……うん、どうしても機嫌直らなかつたら、紺野さんに来てもらって。橋本さん、お気に入りだから。……うん、ありがとう、よろしくね。……うん、じゃあね。はい。

美香、電話を切り、乱暴にTシャツからアップリケをはがし始める。

美香 ごめん、そういうことだから。

雪郎 え。

美香 旅行してる暇ないのよ。

雪郎 いや、だから。

美香 それ(はっさく)ちょっとどけて。

雪郎 ……食べないの？

美香 (Tシャツが)汚れちゃうから。

玄関のチャイムが鳴る。美香がTシャツを置いて玄関に向かう。

雪郎、慌ててマスクをつける。

美香、段ボールを抱えて、戻ってくる。

雪郎 ああ、それ。

美香 (雪郎の様子を見て)来なけりゃいいじゃない、そんなに怖いなら。

雪郎 ……。(と、マスクを外す。)

美香、段ボールを床に置き、蓋を開ける。

段ボールの中から取り出したのは、はっさくである。

雪郎 好きだと思ってる。

美香 ああ。

雪郎 ……。

美香、はっさくを箱に戻す。

そして、Tシャツを手に取る。

雪郎 なあ、やっぱり一緒に。

美香 だから…：

雪郎 旅行じゃなくて。

美香 ……大丈夫よ、この辺は。

雪郎 地元の友達もどんどん帰ってきてるよ、子供連れて。

美香 やだやだ、デマに踊らされて。

雪郎 何言ってるんだ。あんな数値の水が出たんだぞ。

美香 私、もう四十よ。

雪郎 三九だろ。

美香 もう子供産む歳じゃないって言ってんの。

雪郎 そんなのわからないじゃないか。

美香 わかるでしょ。

雪郎 ……。

美香 もう、いいのよ。

雪郎 ……子供産まなかったら癌になってもいいのか。

美香 だって誰も避難してないのよ、うちのスタッフみんな私より若いのに。

雪郎 そんなこと関係ないだろ。

美香 私が避難しなくちゃいけないレベルなら、ものすごい人数が避難しなくちゃいけないんじゃない。

雪郎 だから政府は避難しろって言わないんだよ。避難勧告なんか待ってたら、

殺されるんだって。十年か二十年したらわかるよ。

美香 大げさよ。癌になったって死ぬとは限らないだし。

雪郎 お前は癌の闘病生活がどんなに大変かわかってないんだよ。

美香 ……大きな声出さないでよ。

雪郎 静岡のおじさん見ただろ、無事に退院したって、人工肛門ですぐ服汚しち

やうんだって、部屋に閉じこもりつきりで。

美香 わかったから、もう。

雪郎 仕事も出来ずにたった一人で借金背負って。

美香 わかったってば。政府だって慎重になってるんでしょ、パニックになると

まずいから。

雪郎、美香からTシャツを奪い取る。

美香 なにすんの。

雪郎 もういいだろ。

美香 返してよ。

雪郎 こんな事してる場合じゃないんだって。

美香 仕事やめろっていうの？

雪郎 仕事と命どっちが大切なんだよ。

美香 そんなの極論じゃない。

雪郎 だからそういう事態なんだって、いまは。

美香 じゃあ私は何してればいいの。なんにもない田舎で、知り合いもいなくて、仕事もなくて。

雪郎 農園手伝えばいいよ。

美香 馬鹿言わないで。

雪郎 そんなにやりたい仕事じゃなかっただろ、今のだって。割に合わないって言ったじゃないか。

美香 そんなことない、やりがいであってあるんだから。

雪郎 年寄りだったらあっちにだっていくらでもいるって。

美香、Tシャツを奪い取る。

美香 他人が口出ししないですよ。関係ないでしょ、雪郎には。

雪郎 ……。

美香 そりゃ、なんでこんなに振り回されてるんだろうって馬鹿馬鹿しくなることもあるよ。手当があるわけでもないのに休み返上してさ。だけど、その馬鹿馬鹿しいことに救われることもあるんだよ。あの時だってこんなご飯食べられないって橋本さんが騒いでさ、わかったわかったって声張り上げてたらなんかああ、大丈夫だって。帰ったら掃除でもしようって。雪郎にはわかんないだろうけど、そう簡単にあの人達を放り出せない。

美香、アプリケをTシャツからはがし始める。

携帯電話が鳴り、美香が電話に出る。

美香 はい。ううん、どうもしないよ。…：うん、…：え、…：なにそれ、実家って、紺野さんどこ出身だっけ？ 佐賀、ああ、九州か。…：そんな急に。…：そうだね、しょうがないね。彼女若いし。これからだもんね。…：うん、大丈夫。もっと酷いところを思えばこれくらいは我慢しなくちゃね。…：あなたは大丈夫なの？ …：なに言ってるんの、まだ三十三じゃない。ああ、そうだよね。実家がこっちじゃね。…：逃げないよ、私は、当たり前じゃない。子供生む予定もないし。死なばもろともよ。あはは。そうそう、撃ちてし止まぬ？ 止ま

んでしょ、撃ちてし止まん……

雪郎、携帯電話を奪い取る。

美香 なにすんの。

雪郎（電話に出て）すみません、佐伯はしばらく休みます。

美香 ちよっと！

雪郎、携帯電話を切る。

美香、Tシャツを置き、携帯電話を奪い取ろうとする。

美香 なんてことするのよ。

雪郎 俺のせいにしていいから。

美香 返してよ！

雪郎 頼む、言うこと聞いてくれ。

美香 いいかげんにして。

美香、携帯電話を奪い取って、かけ直す。

美香 あ、斎藤さん、今の気にしないで。明日、ちゃんと行くから。……うん、大丈夫、大丈夫。花飾りも大丈夫だから。……ごめんね、また電話する。

美香、携帯電話を切る。

美香 帰ってくれない。

雪郎 ごめん、でも。

美香（雪郎が使った道具を回収し、花飾りの材料を広げながら）言ったでしょ、今日中に仕上げなくちゃいけないの。

雪郎 終わるまで待ってる。

美香 自分だけ生きようと思わないから。

雪郎 うちが嫌だったら、近くにアパート借りたっていいんだ。

美香 一人で生き残ったって仕方ないでしょ。

美香、もうぜんとな飾りを作り始める。

雪郎 なあ。おい。

美香 ……。

雪郎 メールくれた時なあ、携帯変えたって。

美香 ……。

雪郎 迷ったんだよ、始めは、返信するかどうか。一斉メールだったし、前に田舎に帰ってメールした時も返信くれなかったし。

美香 ……。

雪郎 二日悩んでさ、今度食事でもしようって。

美香、話を遮るように立ち上がり、

出来上がった花飾りを集めて入れるものを探す。

雪郎 それにしても、あんなラーメン屋に連れて行かれるとはな、女一人じゃ入りにくいからって、あれは男だって入りにくいよ。

美香 どいて。

雪郎 ……。

美香、飾りをしまうために、段ボールからはっさくを出し始める。

あたりにはっさくが散乱していく。

雪郎 そうそう、あれ笑ったよな。ラーメン屋でさ、蓋が取れて、酔が全部ラーメンに入っちゃって。お前、笑いすぎて泣いてたもんな。

美香、最後のはっさくを箱から出す。

美香 何が言いたいの？

雪郎 だから、あんなことがなかったらって。

美香 ……。

雪郎 本当はもっと時間かけて話すつもりだったんだけど。

美香 やめてよ。

雪郎 え？

美香 やり直せるわけじゃない。

雪郎 でも、こんな風に笑ったの久しぶりだって。

美香 よく言えるね、この状況で。

雪郎 いやだから、この状況だからこそさ。

美香 相変わらずだよ、ほんと。

雪郎 怒らせたんなら謝るよ。だけど俺だって今度の事故がなかったらこんな強引なことしないって。

美香、手に持ったはっさくを見る。

美香 はっさく捨てたことあったでしょ、段ボールごと。

雪郎 俺が？

美香 私が。ほら、退院してきてすぐの頃。まだ、はっさく食べたいと思えることがショックで、あの子はもういなくなっただけ。

雪郎 毎日そんな感じだったから。

美香 怒ったじゃない、すごい剣幕で。はっさくのせいにするなって。

雪郎 言っていないだろ、そんなこと。

美香 うちのは農薬も使っていないんだって。胎児に悪いもの他にいくらだって食べたくせになって。

雪郎 だから、言っていないって。

美香 言い方は違ったかもしれないけど。

雪郎 ……余裕なかったんだよ、だとしたら。

美香 どっちのせいかってそればかりだったよね、私たち。

雪郎 ……。

美香 変わっていないんだよ、あの頃から。

雪郎 そんなことない。あの頃とは違うよ。

美香 何が違うの？

雪郎 何かって……。

美香、はっさくを置く。

飾りとその材料や道具を、段ボールにしまう。

美香 電話あった、病院から。

雪郎 ……。

美香 未だに電話してたんだね。

雪郎 二年ぶりだよ。

美香 そのこと話しに来たんじゃないの。

雪郎 そうじゃない。

美香 だって調べてるんだよね、どうしてあの子があんなだったのか。

雪郎 確認したいことがあったから。

美香 まだ私のせいだと思ってるんだ。

雪郎 そんなことないよ。

美香 じゃあ、なんで何も説明してくれないの？

雪郎 ……。

美香 私のせいだと思っていないなら、こそこそする必要ないじゃない。

雪郎 忘れたいだろうと思ってる。

美香 忘れないよ、そりゃ。毎晩病院に電話かけてたよね？ 布団の中で怒鳴り声聞くのがどんな気持ちかわかる？ 雪郎が怒鳴りたいのは本当は私なんだって、そう思えて。

雪郎 俺は本当のことを知りたくて。

美香 私は一緒に泣いて欲しかった。

雪郎 泣いたって仕方ないじゃないか。

美香 わかるよ、馬鹿みたいだもんね、泣くのって。

雪郎 俺だけでもしっかりしなくちゃと思ったんだよ。

美香 堕ろすこと決めた時も。

雪郎 あれは。

美香 ずっと待ってたんだよ、雪郎が仕事抜けられないって言うから。それなのに私の話も聞かないで勝手にどんどん話進めて。

雪郎 仕方なかっただろ、ああするしか。

美香 ほんとに？

雪郎 早くしないと母体に負担がかかるって言うし。

美香 私の身体でしょ、勝手に判断しないでよ。

雪郎 話なんかできる状態じゃなかった。何言ったって上の空で。

美香 何の異常も感じてなかったのよ。毎日蹴られて痛いくらいだったのに。

雪郎 先生に言われたんだよ、どっちにしろ生きられないなら早い方がって。

美香 どうして。

雪郎 情がわくからだろ、胎動感じてるうちに。

美香 そんなのもう遅いよ。半年も一緒にいたんだよ。

雪郎 ……。

美香 お風呂から上がるといつも蹴るの、もっと入っていたかったのね、ぼこぼこって小さい足で。痛いでしょってお腹叩くと、またぼこぼこって。

雪郎 堕ろすしかなかったんだって。

美香 でもさ、脳がなくても、ちゃんと生まれて、数時間でもこの世に存在した子もいるんだよ。この手に抱いて、ちゃんと看取ってやることも出来たかも知れないんだよ。

雪郎 ……。

美香 あれじゃ生まれたら困るみたいじゃない。

雪郎、何かに気がついて、呆然となる。

雪郎 ほんとだ…

美香 なにが？

雪郎 ……いや。

長い沈黙。

美香 なんなのよ。

雪郎 広島で生まれたんだって。

美香 誰が。

雪郎 はっさく。戦後らしいんだ、他の県に広がったの。戦争でどれくらい駄目

になつたのかはわからないけど。

美香 いいかげんにしてよ。

雪郎 ひよっとして、広島からうちも移住してきたのかもしれない。

美香 ……。

雪郎 広島じゃなくても可能性あるんだ。

美香 何が言いたいの？

雪郎 海でも山でも検出されないとこってないらしいんだ。

美香 それが原因だって言うの？

雪郎 ……。

美香 だってありえないじゃない。

雪郎 俺もそう思ってた。けどさ、俺が生まれた頃にはもうこの辺だって汚染

されてたんだよ。戦争に勝った国はこぞって実験繰り返してたし、施設からは

汚れた水が垂れ流されてたし。つきあい始めた頃に毎週行ってた湖ってあの事

故起こした施設の近くだなあとか、二人でフランス行って生ガキ食いまくった

なあとかさ。

美香 だから？

雪郎 だから確証なんかどこにもないけど、どこで取り込んでたって不思議じゃ

ないんだよ。

美香 そんなの、公害だって多かったし、アスベストとか排気ガスだって。

雪郎 そうだって言い切れるか？ 言い切れるか？

美香 それに私、たばこ吸ってた。十八からずっと。だから。

雪郎 たばこ吸う人は減ってる。だけど、病気の数は減ってない。

美香 そんなこと言ったら。

雪郎 原因は他にもあると思う。子供の頃、舌が真っ赤になるようなもんしょっ

ちゆう食ってた。家の中は親父のたばこでモクモクで、排気ガスだって今より

酷かった。けどどいくら他に可能性があったって、その一つの可能性が否定で

きるわけじゃないだろ。

美香 ……。

雪郎 そうだよ、否定できないんだ。むしろ真っ先に疑っていいはずなのに全く

思いつきもしなかった。なんでだ？ 合成着色料、たばこ、アスベスト、紫外

線、いろんなものが批判されてきたのに、ひとつだけ誰も疑わないなんて。お

かしいよ、おかしいだろ。

美香 ……。

雪郎 疑わないようにされてるとしか思えないんだよ。疑われると困る人間がい

て、気がつかないうちに操られてる。

美香 ……。

雪郎 この町から逃げない人たちだってそうだ。安全だって言い張る政治家も、

たぶんあの医者も。 ……俺も。

雪郎、はっさくの 一つを拾い上げ、
赤子の小さな遺体を抱えるように両手で包み込む。

雪郎 イラクとかじゃさ、劣化ウラン弾のせいで奇形の子が沢山生まれてるんだよな。去年の暮れに観たんだ。写真展やってるって同窓会で聞いて。お袋に詮索されんのが嫌で嘘ついてさ。あの時はこんなに酷いことが起きてる場所があるのかって信じられなかったよ。

美香 やめてよ、もう。

雪郎 ここでも起きてることだったなんて。

美香 わかったから。

雪郎 なんでこんなになっちゃったんだ。

雪郎と美香、あたりを見回す。

そこにははっさくがいくつも転がっている。

雪郎 目も口もない握った拳みたいな顔をした子。背中に爆撃を受けたみたいに見える大きな穴が開いてる子。肌が白や黒のてらてらで覆われてる子。腕のない子、足のない子。……頭のない子。

美香 やめてってば。

雪郎 ……そういうや、名前もつけてやらなかったな。

美香、思わずはっさくをはたき落とす。

雪郎 おい！

雪郎、落ちたはっさくに駆け寄り、土を払うようになでる。

美香、後ずさりする。

雪郎、美香の様子に気が付き、はっさくを置く。

雪郎 美香。

美香 ……なんなのよ。

雪郎 とにかくこんなところにいたら駄目だ。

美香 ……。

雪郎 わかっただろ、殺されるって。

美香 行かない、私は。

美香、Tシャツを持つ。

美香 大丈夫だから、心配しないで。

美香、Tシャツを握りしめ、周囲に転がるはっさくを遠くへ押しやる。

美香 直さなきや、早く。出来なかったら橋本さんがっかりする。

雪郎 どうしてそんなに人の目気にするんだよ。

美香 そんなんじゃない。ただみんなと一緒にいたいだけ。私だけ生き残ったって幸せになんかなれないから。

雪郎 全員不幸になればそれでいいのか？

美香 斎藤さんが言ってた、もっと酷いところにいる人たちがどんな想いをしてるかって。可愛がってた牛殺して。家族と別れて。こんなに離れてる私が騒いだらみっともない。

雪郎 いいじゃないか非国民って言われても。

美香 そうじゃないってば。

雪郎 自分の命を守るのがそんなにいけないことなのか。どうして駄目なんだよ、この辺の人間が避難したら、四十過ぎがマスクしたら。

美香 やめてよ、そういうこと言うの。

雪郎 だから話さなかったんじゃないか。

美香 え？

雪郎 怖がるから。

美香 怖くなんかないわよ。

雪郎 ……。

美香 そっちでしょ、怖がってるのは。

雪郎 ……。

美香 雪郎言ったよね、あの子カエルみたいだったって、真っ青な顔して。

雪郎 ……。

美香 なによ、その顔。

雪郎 もういい。

美香 言いたいことがあるなら、言ったらいいじゃない。

雪郎 いいんだって。

美香 言えて言ってるの。

雪郎 お前は見られなかったじゃないか、あの子の顔。

美香 ……。

長い沈黙。

雪郎 ……ごめん。

美香 出て行ってよ。

雪郎 傷つけるつもりじゃなかった。

美香 出て行って。

雪郎 一緒に逃げたかっただけなんだ。

雪郎、一步美香に近づく。

美香 近づかないで。

美香、置かれていたナイフを手に取る。

美香 出て行つて。

雪郎 ……。

美香 大丈夫よ、まだ耐えられる。もうちょっと辛抱したら、また元通りになるわ。戦争で焼け野原になったってちゃんと復興できたんだから。みんな頑張ってるのに、自分だけ逃げられない。そんなんで、生き延びたって、申し訳ないもの。そんな恥かくくらいなら死んだ方がまし。死なばもろともよ。

雪郎 ……。

美香 もう来ないで。私は何も怖くないから。

長い沈黙。

突然、雪郎がどかっと腰を下ろす。

そして、猛然とはっさくを食べ始める。

美香 なに？

雪郎 (食べている。)

美香 なにしてんのよ、早く出てって。

雪郎 (食べている。)

美香 なんなのよ。

雪郎 美味い！

美香 え？

雪郎 美味いよ、これ。やっぱりうちのは違うわ。俺、もうこれ商品って呼ぶのやめる。生命だわ、これは生命。

美香 ……。

雪郎 なんで俺たちが憎み合わないといけないのかなあ。あんなもん、俺が作ったわけでも、お前が作ったわけでもないのになあ。知らなかっただけでさ、もうどうにもなんないのかな。もっと悪いやつがいるはずなのに、なんで俺がナイフ向けられてんだよ。どっかで笑ってるやつがいるはずなのに、なんであの子はあんなだったんだよ。

雪郎、泣くまいとはっさくを食べ続ける。

美香、それを呆然と眺める。

日が傾いた。

外の音が聞こえてくる。

自転車の音。挨拶を交わす人々の声。下校する子供達の声もする。

雪郎も手を止めて、声に聞き入る。

美香 女の子だったのよね。

雪郎 畑から帰るとき坂の上に立つと思うんだ、オレンジ色の海から風が吹いて、はっさくの匂いがしてさ、全部夢だったんじゃないかって。

雪郎、言い聞かせるようにはっさくを食べ始める。

美香、はっさくを食べ始める。

雪郎は一瞬手を止めそれを見つめる。

二人、いつまでもはっさくを食べ続ける。

溶暗。

（第8稿 2011年9月30日）

幕